

ここからでも、またも、  
踊ればアガるぞ!

# Dance Residence

## 豊橋アーティスト・イン・レジデンス2018 ダンス・レジデンス

木村玲奈 / 「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクト

工藤聡

Co.山田うん

長谷川寧 / 富士山アネット



Co.山田うん「いぎのね」  
リクレーション成果発表会より

豊橋市 / 穂の国とよはし芸術劇場PLAT



# Dance Residence

または創造の芽にあふれてる

国内外で活躍する優れたアーティストを迎え入れ、創作や稽古の場を提供する「豊橋アーティスト・イン・レジデンス」が2年目を終えました。昨年度に引き続き〈ダンス・レジデンス〉と題して、舞踊や身体表現を追求する4組が参加。いずれのアーティストも創作のためのリサーチやディスカッション、稽古に励む一方、一般向けワークショップや稽古場見学、成果発表会などを精力的に行い、市民に関われた企画としても好評を得ることができました。特に今回は、地域に根づく文化と密接に関わりながら国際性も豊かな作品が目立ち、いたるところに創作のヒントは見つけられるのだと再認識。まちそのものが創造の源流になったり、ステージになったりすることを実感できました。

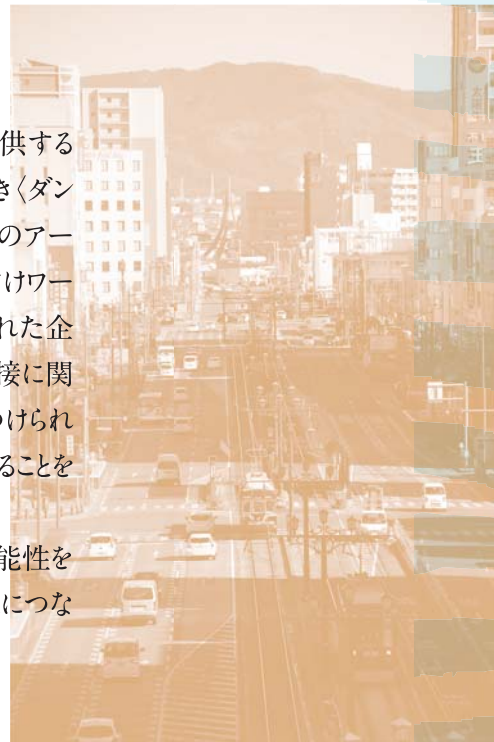
芸術は、特別な場所・特別な人だけが生み出すものではなく、誰もがその可能性を秘めています。市民一人ひとりの声が、発想が、行動が、新しいアートの未来につながっているのです。

## ●実施データ

アーティスト滞在日数……………43日  
 イベント開催日数……………14日

レジデントアーティスト  
 および滞在メンバー……………33名

ワークショップの参加者数……………106名  
 成果発表会の参加者数……………47名  
 稽古場見学の参加者数……………184名  
 参加者合計 337名



## 滞在制作を終えて

豊橋で感じたことは「人の気配」でした。道、喫茶店、商店街、公会堂、公園、そしてお世話になった滞在先のお家からも、かつてその場所に人が集い、時を過ごした痕跡のような気配を色濃く感じました。私達は衣食住を通して豊橋という土地・空気を身体に染み込ませると同時に、過去と現在に影響を受けながら、作品の中で生きる身体と、日常で生きる身体を繋ぐ12日間を豊橋で過ごすことができました。過去から未来へ、豊橋での時間を蓄積した身体で、私達はこれからも「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」を育て続けます。

## 滞在制作を終えて

朝9時から、遅い時は夜9時過ぎまで、アーティストたちと共にじっくりと作品の意味や、動きのセオリーに至るまで深く掘り下げる事が出来ました。期間中に行われたワークショップや公開リハーサルでは、そういった成果やプロセスを、市民の皆さまと共有する事で、新鮮さを取り戻す良いインスピレーションを得ることができました。将来的には、豊橋の皆様に作品をお見せできる機会があることを願っています。

## 滞在制作を終えて

ダンサー16名と共に東京で活動する環境は疲労と苦労がつきものです。各々の舞台活動や忙しいアルバイト生活、情報過多から離れ、ただカンパニーの稽古だけに集中できる豊橋での日々はただただ充実のありがたい時間でした。成果発表やワークショップでは地元の方々とも交流、意見交換が有意義でその後の稽古に反映されました。

## 滞在制作を終えて

私達の今回の作品「霧の國」は参加型で、会場を霧を満たすという作品。これが案外厄介なもので、通常の稽古場では煙探知機が作動してしまい試すのが難しい。今回、PLATの全面協力のもと、会場を霧で満たすとうなるか、実際に実験出来たというのは私達のクリエイションにとって大きい事のひとつでした。WSや成果発表にて参加者に作品を体験して貰いましたが、この劇場が行って来た地域への活動で根付いた参加者による忌憚りの無い様々なフィードバックは、本作のその後の創作に良い影響をもたらしました。再びこの土地で何か結び合う事が出来れば、と思っています。



Photo : Sakiko Azegami

## Artist Profile

### 木村玲奈 / 「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクト ★

Reina Kimura / “born somewhere, live somewhere.” project

青森市出身。ダンサー・振付家。東京、神戸を拠点に活動。2008年～、ショーネット・ヒューズの作品に関わる。環境や言葉による身体の変化や状態、人の在り方に興味を持ち、国内外で創作。横浜ダンスコレクションEX2014作品部門I、トヨタコレオグラフィアワード2014ファイナリスト。東アジア・ダンスプラットフォーム 1st HOT POT プログラム招聘。18年から藤澤智徳と長野にて「プライベート・レジデンス」プロジェクトを継続し、ダンスと人・土地の新しい関わり方を探っている。

滞在期間：2018年9月6日～17日  
 滞在メンバー：木村玲奈、遠藤僚之介、鐘ヶ江歓一、佐藤有華、重里実徳、田添幹雄、中間アヤカ  
 活動内容：「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクト(2012年～)のためのリサーチと創作活動  
 ワークショップ：「会話する声」を音として聴いて、そしてその音で踊ってみよう! (2018年9月9・15・16日開催 / 延べ52名参加)



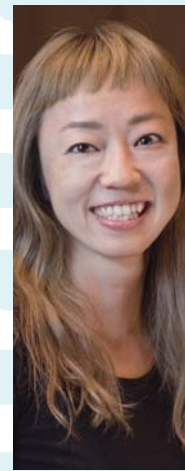
Photo : Piotr Korytowski

### 工藤 聡 ★

Satoshi Kudo

名古屋市出身。ダンサー・振付家。スウェーデン在住歴20年。2001年にオハッド・ナハリン作品出演、ディニッシュ・ダンスシアターで活動した後、06～13年、シディアルビ・シェルカウィのダンサー兼振付アシスタントとして活動。15年には王立スウェーデンバレエにおいてリハーサルディレクターとしてマッツ・エックなどのコンテンポラリーダンス作品を担当した。日本人では平山素子、伊藤郁女、大植真太郎、稲尾芳文らとコラボレーションを行っている。

滞在期間：2018年11月26日～12月8日  
 滞在メンバー：工藤 聡、Claire Camous(クレア・カムース)、豊永洵子、村田勇人  
 共同創作メンバー：Louice Magnusson(ルイス・マグヌソン)、Lucia Vazquez(ルシア・ヴァズケス)  
 活動内容：工藤聡振付作品「Credo」/「Necessitudo」の創作活動 (2018年12月14日、長久手市文化の家にて上演)  
 ワークショップ：「モーション・クオリアによる身体表現」(2018年12月1日開催 / 14名参加)  
 協力：The Swedish Arts Grants Committee / Konstnärnämnden / Carina Ari Foundations



### Co.山田うん

Co.Un Yamada

1996年から振付を開始。2000年、横浜ダンスコレクション・ソロ×デュオコンペティションで「若手振付家のための在日フランス大使館賞」を受賞して渡仏。02年、「Co.山田うん」を設立する。音楽、美術、文学ほか異分野とのコラボレーションも多く、演劇やオペラ、新体操への振付も担当。海外の国立芸術大学やダンス教育機関に招かれ、世界的人材の育成にも貢献する。第8回日本ダンスフォーラム大賞、平成26年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。平成28年度文化庁文化交流使。

滞在期間：2018年12月10日～16日  
 滞在メンバー：山田うん、飯森沙百合、伊藤知奈美、川合ロク、河内優太郎、木原浩太、小山まさし、酒井直之、城 俊彦、西田祥子、西山友貴、長谷川暢、広末知沙、三田瑠子、山口将太郎、山崎真結、山下彩子  
 活動内容：Co.山田うん「いぎのね」リクリエーションの創作活動 (2019年2月16・17日、KAAT神奈川芸術劇場にて上演)  
 ワークショップ：「踊るよろこびと新しい身体に出会う」(2018年12月12日開催 / 26名参加)



Photo : Hideki Namai

### 長谷川 寧 / 富士山アネット

Ney Hasegawa / Fujiyama Annette

富士山アネット・長谷川寧を代表とし、設立。作品毎にクリエイターを集め公演を行う。近年では他ジャンルとのコラボレーションを通じて作品の本質を見詰め直す「疑・ジャンル」をテーマとし様々な活動を行う。近年では、2017年にベルリン・Theatertreffen International Forum招聘、18年に中国・梁空間によるミュージカル『白夜行 音楽劇』の演出・振付、急な坂スタジオ・サポートアーティストの採択のほか、19年には台北国際藝術村での滞在制作を行うなど、国際的な活躍でますます注目を集める。

滞在期間：2019年1月22日～2月1日  
 滞在メンバー：長谷川寧、綾門優季、石本華江、富樫多紀、長尾 望  
 活動内容：富士山アネット「霧の國」の創作活動 (2019年2月10日～12日、THE HALL YOKOHAMAにて上演)  
 ワークショップ：「嘘の身体」(2019年1月26日開催 / 14名参加)

★印のアーティストは公募参加



# まちと密着しながら世界水準のクリエイションを

## 奥三河の「花祭」から ダンス・レジデンス・プロジェクト

Co.山田うん「いきのね」  
リクリエーション成果発表会より  
撮影：羽鳥直志



Co.山田うんがリクリエーション(再創作)した『いきのね』は、奥三河・北設楽郡に伝わる「花祭」にインスパイアされた作品です。花祭の歴史は鎌倉時代末期から室町時代にさかのぼると言われ、国の重要無形民俗文化財にも指定されているだけに、三河が誇る文化として親しまれてきました。その最大の見どころである伝統的な舞いが、コンテンポラリーダンスという現代の芸術になったのは2016年のこと。あいちトリエンナーレ2016のラインナップとして発表された『いきのね』は、舞いや振付を引用するのではなく、花祭のエネルギーそのものを独自の解釈で舞踊化して好評を博しました。演出・振付した山田うんとカンパニーの面々はトリエンナーレに先駆けて花祭を実際に

体験しましたが、ダンス・レジデンスを通じて再び三河の空気を吸いながら滞在制作することとなったのは、うれしい巡り合わせです。本番に向けての試演に当たる成果発表会には、新聞報道などを目にした高齢の方々も数多く来場。舞台芸術と観客の新しい出会いにも一役買いました。

木村玲奈／「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」  
プロジェクト成果発表会  
水上ビル 大豊商店街B棟「みずのうえ」より



木村玲奈／「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」  
プロジェクト成果発表会 「喫茶水鳥」より

喫茶店で、  
商店街で、  
踊っちゃいました!

# 地域性 × 国際性

創作は必ずしも劇場の中で行われるわけではありません。木村玲奈による「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクトは、全国各地に一定期間滞在し、まちや文化と触れ合いながらダンスを創作する企画。木村たちは豊橋市公会堂や豊橋市美術博物館といった文化施設から生活感たっぷりのエリアまで取材してダンスの映像を撮影しました。そして蓄積した豊橋の記憶を踏まえ、成果発表会を実施。会場は喫茶「水鳥」に始まり、水上ビルの大豊商店街を巡ってPLATへとたどりつくという移動型の趣向です。最初は何気ない動作が徐々に大胆な動きとなるにつれ、鑑賞者は日常空間に非日常が侵食していく様子を体感。知っていると思っていた風景が違う角度で見えてきて、まちの潜在能力を感じることもありました。なお、木村たちが各所で出会った人々は稽古場見学や宣伝活動でもダンス・レジデンスを積極的に支援。市民と劇場の新たな交流にもつながりました。

工藤 聡「Credo」「Necessitudo」公演を行う長久手市文化の家のスタッフとともに



工藤 聡が滞在制作を行った『Credo』『Necessitudo』は、滞在直後の12月14日、同じ愛知県内の長久手市文化の家で公演本番を迎えました。この公演は、あいちトリエンナーレ2016公募プログラムとして発表された「シール」で工藤とダンサーの豊永洵子が出会ったことが大きく影響しており、豊永が創造スタッフを務めている長久手市文化の家の自主事業としてラインナップ。同劇場では久々に行われたコンテンポラリーダンス公演で

したが、幅広い観客層が来場する異例の成果を挙げています。日本国内では滞在制作の環境や条件が発展途上にあり、工藤たちはPLATの設備やサポートを大いに喜び、活用してくれました。滞在中には長久手市文化の家の職員が視察・激励に訪れ、両劇場の交流も深まっています。県の事業、各市の事業がつながり、新たな創造を生み出したことは、今後の連携のあり方を考える上でも好例となりました。

## 日本と海外勢の 混成チームが初参加

名古屋市出身、スウェーデン在住歴20年の工藤聡は、国際色豊かな編成でダンス・レジデンスに参加してくれました。まずダンサーは、工藤本人を含む日本人3人とフランス人1人。さらにスウェーデンから作曲家を迎え、日本在住のスペイン人が振付アシスタントを務めるという多国籍ぶりです。作曲家はスウェーデンの助成金を得て来日しており、ダンス・レジデンス2年度目にして、また一歩進んだ可能性を示すこともできました。また、成果発表会では質疑応答の時間が設けられ、工藤がスウェーデンの文化事情について説明する場面も。「アート」と「エンタテインメント」がはっきりと線引きされているスウェーデンでは、アートならば自らの考え方や問題意識を表明する必要があること、そして、工藤にとって社会へのメッセージを伝える手段がダンスであることなどが語られました。参加者は両国の文化的背景にも触れられ、より充実した交流が実現しました。

工藤 聡 成果発表会「Necessitudo」より

## 愛知県内、市と市の 連携も実現



工藤 聡 成果発表会「Credo」より  
右が長久手市文化の家創造スタッフの豊永洵子

## みんなの声

※一部抜粋

今までにあまり見たことがない不思議なダンスでした。なかなか稽古を見る機会もないので新鮮に見ることができました。

(稽古場見学参加者・40代・男性)



木村玲奈／「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクト アンケートより

意識みたいなのが外部から入ってくる感じ。それはすごく遠いところから来てる気がします。限りなく無意識に近い運動は、僕をそういう遠いところへつれていってくれと思いました。コトバ×イメージ×サウンド(ダンス)。

(稽古場見学参加者・20代・男性)

指先のわずかな動きに緊張しました。日常の体の動作とダンスの違いについて考えたりしました。とても貴重な時間を共有できたと思います。

(成果発表会参加者・50代・男性)

録音を聞きながら、ダンスの表現ぶりを見ました。音楽ではなく、声でダンスを見ました。話し声を音にしてつくる新しいダンスは本当にすごいと思いました。

(成果発表会見学者・40代・女性)



工藤 聡 アンケートより

目線の大切さ。重心移動の大切さ。足1歩で変わるということ。同じ動きでも工藤さんがやると本当にしなやか。そしてドラマがみえる。昨日のワークショップ受けられなくて本当に残念でした。

(稽古場見学参加者・50代・女性)

作品が作られていくプロセスを見ることが、本番を見る深さが変わると感じました。

(稽古場見学参加者・40代・女性)

自分の身体と向き合った2時間でした。人と向き合い、コミュニケーションを取るところから生まれるダンスだからこそ、人の心に響くのだと思います。

(ワークショップ参加者・50代・女性)

「Credo」…カップルが夫婦になり、結婚生活の荒波の中を共生する姿に見えました。「Necessitudo」…身体の動きが演技ではなく必然の動き。ひと筆のように、どぎれなく、流れるようで、一つの曲のようだった。

(成果発表会参加者・30代・男性)



# 最先端でありながら永遠のテーマを内包する

## 先進性 普遍性

参加型ゲームともリンクする  
最新の劇場カルチャー

参加アーティストたちが取り組むコンテンポラリーダンスの「コンテンポラリー」には「現代的」「今日的」といった意味合いもありますが、それ以上に「同時代性」を強く意味しています。世代を問わず「同じ時代」に生きていることを重視するので、国や人種などの壁を越え、子どもからお年寄りまで共通の問題と向き合ったダンス作品と言えるかもしれません。木村玲奈のワークショップ「『会話する声』を音として聴いて、そしてその音で踊ってみよう!」には、ダンス経験を問わず小学

校1年生からシニアまでの市民が参加。木村が継続する「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクトの創作プロセスにのって、言葉と身体の関係性を探りました。もちろん動きは個々の状態に合わせて無理なく実施。小学生と高齢者という日頃なかなか同じテーマで出会うことのない世代と世代が、コンテンポラリーダンスを通じて一緒に考える場を得られたのです。その背景にあるのは「アートをどう共有していくか」という先進的な意識に他なりません。



木村玲奈「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクト  
ワークショップ「『会話する声』を音として聴いて、そしてその音で踊ってみよう!」より

小学生からシニアまで、  
これぞコンテンポラリー

教育現場を含めたダンスの普及に伴い、広く市民が「コンテンポラリーダンス」という言葉を耳にするようになりました。そこには最先端、最新鋭であるという先進性が常に期待されます。長谷川寧率いる富士山アネットは、出演者0人(!)の観客参加型ダンス作品や、リアル脱出ゲーム業界の雄SCRAPの『アンドロイド工場からの脱出』を共同演出した長谷川の経験を踏まえ、「イマーシブ・シアター(没入型

劇場)」として「霧の國」を滞在制作しました。ダンス・レジデンスの成果発表会はその試演として実施され、参加者は本番さながらに霧で視界を奪われる、めずらしい作品形態を体験。ダンスが持つイメージも大きく塗り替えられました。国内外を飛び回る長谷川たちの新たな舞台表現の開拓は、日本発の強力コンテンツとなりうるだけに、豊橋にとっても大きな刺激となりました。

長谷川 寧／富士山アネット「霧の國」  
成果発表会より



ワークショップで  
表現や創造の根幹に触れる

山田うんワークショップ  
「踊るよろこびと新しい身体に出会う」より



工藤聡ワークショップ  
「モーション・クオリアによる身体表現」より

山田うんのワークショップは中学生以上を対象に開かれ、見学者まで巻き込んで大盛り上がり。山田振付によるストラヴィンスキー『春の祭典』を踊ったかと思えば、都はるみの『好きになった人』に合わせて「お掃除ダンス」を自由に表現。場内は「踊るよろこび」にあふれました。なお、ブラジル人男性が初参加。日本語が話せない彼はダンスでコミュニケーションがとれたことにも喜びました。また、工藤聡のワークショップでは自身のメソッド

「モーション・クオリア」を解説&実践。参加者は不安定なバランス状態を作り、反射的になる動きをダンスにしていくなかでメソッドの基礎を体験しました。工藤は演劇を経てダンスに進んだこともあり、他者との関係から生まれる動きの必然性や固有性に着目。決められた振付とは違う美やエネルギーとともに、あらゆる人が創造できることを示しました。知識や技術だけでなく普遍的・根源的な力を再認識できるのもダンス・レジデンスの大切な役割です。

### 「國」という文字から 人と社会の関係を探る

イマーシブ・シアター(没入型劇場)という最新鋭のスタイルを提示した長谷川寧／富士山アネット。そして生まれた作品「霧の國」で彼らが表現したのは、国という概念と人間に関する普遍的な問題です。いにしえから私たち人間は、国あるいは国境をめぐって紛争を繰り返して、悲劇を重ねてきました。旧字の「國」の中にある文字が「惑」につながるからと言って「国」に変えてみたところで、人間の惑いは尽きません。むしろ現代では、グローバル化を声高に叫んでいたと思いきや、

気づけば自国ファーストが蔓延。文化の多様化を頭では理解しつつも、他者の思想や価値観を尊重しない方向に進んでいるのではないのでしょうか。長谷川は先行き不透明な現代日本を霧の中にある国と捉え、国構えに通じる大きな四角いオブジェも登場させて、果敢な作品に仕立て上げました。本公演に先駆けた成果発表会での声はさまざまですが、参加者の反応や意見が著しく異なるほど、富士山アネットの投げかけたものは重大だったと考えられます。



長谷川 寧／富士山アネット「霧の國」成果発表会より

### みんなの声

※一部抜粋



Co.山田うん アンケートより

ダンス・レジデンスを全く知らず、今回知ってとてもよい活動だと思いました。豊橋に住んでいると豊橋はあまり特徴ないと思いますが、こういう活動、考え方を特徴にしているとおもしろいと感じました。

(成果発表会参加者・40代・女性)

カンパニーのメンバーも一緒に踊ってまるで花祭のような祭を楽しむ感じだった。舞いやダンスってももとは祝祭のような豊作を幸福祈り願うものだったのではと気づいた。踊るってよろこびなんだと踊りの原点を感じるワークショップだった。

(ワークショップ参加者・60代・女性)

I feel the emotion in the acts, with the mixture of contemporary movements and the traditional. It was very thought-provoking and a rereading of a Japanese traditional.

(成果発表会参加者・20代・男性)

芸術はあまり分かりませんが、出来上がった作品を見るよりも迫力があり、子ども達も分からないなりに見入っている時間があり、何か一つのきっかけになればと思います。

(成果発表会参加者・40代・女性)  
／※お子様…5歳・8歳



長谷川 寧／富士山アネット アンケートより

全体的に、とても新鮮な舞台芸術体験でした。ラジオ体操をしている時に、とてもディストピア感を感じました。

(成果発表会参加者・40代・男性)

長谷川寧さんチームの作品作りが素晴らしい!! 日本では、なじみのない手法かもしれないですが…。豊橋に、東海地方にパフォーマンスアーツの面白さ、奥深さが共に芽吹き、拡がりますように!

(成果発表会参加者・40代・女性)

社会心理学の実験的場に参加した感動が体験できる作品でいろいろな感情が喚起されておもしろかったです。社会の分断、格差社会をリアルに感じられるように今後演出がどう変わるか楽しみです。

(成果発表会参加者・50代・男性)

チラシに「レジデンス協力 豊橋市」と書いてあってレジデンスって何だということから霧の中にほりこまれることになった。いつもは行くばかりだが、地方に来てくれてありがたい。

(成果発表会参加者・20代・女性)





山田うんワークショップ「踊るよこびと新しい身体に出会う」より



誰もが踊れる、創造できる——



木村玲奈「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」プロジェクト  
ワークショップ「『会話する声』を音として聴いて、そしてその音で踊ってみよう!」より